

1) 強直性脊椎炎とリウマチ性多発筋痛症

NTT 西日本大阪病院リウマチ・膠原病センター

副センター長兼アレルギー・リウマチ・膠原病内科医長 比嘉 慎二 ひが しんじ

強直性脊椎炎は、主に背中（脊椎）や腰（仙腸関節）やお尻（坐骨神経）、時に股や肩などの大きな関節、さらには腱や靭帯の骨への付着部（アキレス腱の付着部である踵など身体各所にある骨の出っ張り）の痛みや、体のこわばりなどの症状がみられる病気です。そして、これらの症状は朝に強く、安静時よりも運動した時の方が軽くなるのが特徴です。

そこで、今までは運動療法や飲み薬による痛み止めが治療の中心でしたが、長期間治療されている患者さんの中にはこれまでの方法では効果が十分に得られない患者さんもありました。しかし、最近、強直性脊椎炎の症状を引き起こす原因の一つとして、炎症物質である TNF α が関係していることが明らかになり、これまで主に関節リウマチの患者さんに使用されてきた抗 TNF α 抗体製剤が強直性脊椎炎の新しい治療薬として期待されています。

一方、リウマチ性多発筋痛症は、他にはっきりとした原因がみとめられない肩腰周囲の筋肉痛を起こす病気で、血液検査で CRP 高値、血沈亢進などの炎症反応を認めるのが特徴です。しかし、これといった決め手になる検査がないため、診断は関節リウマチなどの他の膠原病や感染症などではないことを確かめながら総合的に行われます。50 歳以上の方に多く、発症時の平均年齢は 65 歳くらいです。男女比は 1 : 2 とやや女性に多いと言われています。

リウマチ性多発筋痛症では、全身の症状、筋肉の症状、関節の症状の 3 つが主な症状です。全身症状としては、発熱、食欲不振、体重減少、全身倦怠感、抑うつ症状などがみられます。筋肉の症状としては、両側の肩、首、腰、臀部、大腿などに痛みやこわばりがでます。半数以上の人ではこの肩周囲の症状が最初に現れます。しかし一般に筋力が低下することはありません。関節の症状として朝の手のこわばりや関節痛がみられます。とくに夜の痛みが多く、睡眠時の寝返りなどで痛みが起こり、目が覚めてしまうこともよく起こります。手関節などが関節リウマチのように腫れることはあまりありませんが、全くないわけでもありません。元気がないことからうつ病と間違えられたり、肩の痛みから五十肩と誤診されることもあります。

リウマチ性多発筋痛症にはステロイド薬がとてもよく効きます。しかも、比較的少量で劇的な効果が期待されます。しかし、安易に量を減らしたり服用を中止してしまうと、再び病気が悪くなりますので、必ず医師の指示通りの服用をすることが大切です。

講師紹介

和歌山県立医科大学卒業、大阪大学医学部大学院卒；医学博士。阪大病院、市立堺病院、日生病院などを経て、NTT 西日本大阪病院アレルギー・リウマチ・膠原病内科勤務。

日本リウマチ学会、日本アレルギー学会指導医・専門医。